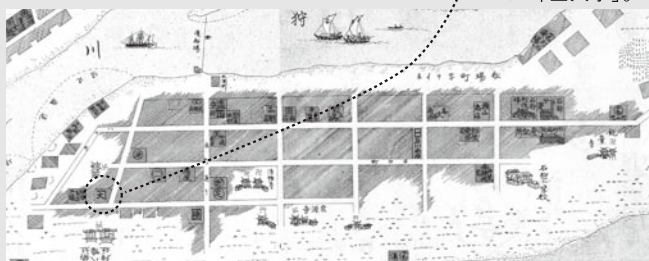


# 広告



▼キャベツと玉ネギ、つきこんにゃくが入った昔ながらの石狩鍋が楽しめます。



▼明治36年の石狩本町地区の地図。天(かねだい)とあるのが「金大亭」。

さげます 鮭鱒料理店として「金大亭」が今の場所に店を構えたのは明治13年—今から130年前のことです。

初代・石黒サカさんが新潟から移り住んだころの石狩は、サケ漁で最も栄えたころ。「出稼ぎに来た漁師を相手に商売していたと聞いています」とは4代目の石黒聖子さんで、「昭和初期までは芸者さんも抱えていて、当時の三味線や鼓、かざしなどは今も店に残っています」と教えてくれました。

驚くのは、建物自体がほぼ創業当時のままとということ。100年以上も前から育ち続ける藤棚の下を抜け、創業時から守り続けるのれんをくぐって玄関に入ると、どこか懐かしい木の匂いが香ってきます。

「窓枠だけは木からアルミに変わったものの、それ以外はほぼ明治時代のままです。本当は窓枠も変えたくなかったのですが、さすがに石狩の冬は厳しくて…。ただ、生きている木のぬくもりというものを年々感じるようになりまして、この建物に守られているんだな、という想

## 130年前の面影を 今に残す「金大亭」

▼小樽の料亭をモデルに建てられた明治建築。



いを強くしています」

明治のころから場所も変わらず、今も現役として使われている建物は、北海道内でもそう多くはありません。「鮭を干すための吹き抜けや、井戸がある調理場も昔のまま。だから、冬になると野菜が凍るほど寒くなります。とはいえ130年の間、こんなふうに変わず続けていることにお客様は喜んでくださるわけですし、またこうして元気にやってこられたのも、そんなお客様の支えがあったからこそと思います。お客様への感謝の気持ちを忘れず、これからもこの建物で一日一日を大切にしていきたいですね」

●金大亭 所 新町1 ☎62-3011

### 運動

今日ほど年代を問わず身体を動かすことに熱心な時代は無いだろう。過日、市内で開催の市民スポーツまつりの参加者は六千人を超え、高齢者・障がい者の合同スポーツ大会も「サン・ビレッジ」っぽい盛況ぶりだった ◆何故人は身体を動かすかとの問いに、即刻命の保持ではと答えたい。食の確保と外敵から身を守るため、知能と身体機能が進化し、差別化を表現するため競技が生まれた。辛く苦しい継続性を伴うトレーニングも命と差別化の頂点を求めることではないか ◆十五世紀の書物に「天輪日夜に運動」と、名詞として使われている「運動」。他動詞として「運動する」の意では『養生訓』に「時代に従い、身を運動し」を見つけることができる。興味深いのは明治半ばの新聞記事に「運動は身体を動かすこととして明治七、八年から行われ始めたのが、近頃では一変して運動費だの示威運動だのと用いられる」と、今では当たり前前に使用される言葉の意も、百年ほど前は乱れた使い方とされていた。言葉の変化も進化という「運動」である ◆北海道の子ども達の平均体力は心配の種。運動量の問題だとしたら、地域挙げての取り組みを展開する必要がある。「子どもは風の子」と言われたあの時代に戻るのも回帰という「運動」なのだから。(市長)

※江戸時代の儒学者・貝原益軒が著した教訓書